

刷新は日々に

1



実際のコミュニティ現場に赴き、体験して学ぶ
「コミュニティ運営実習」

学園は平成十（一九九八）年以來大きく変貌していく流れの中に入った。

まず、設置申請していたコミュニティ政策学部が四月、愛知学泉大学第三の学部として誕生した。新時代の要請に応えた新しいコンセプトの学部として、「日本初」の設置でもあった。

新学部の名称の目新しさもあってか、入試では定員百九十名に対して六百四十四名の志願者が集まった。コミュニティ政策学部というなじみのない学部の初年度入試としてはまずまずの志願者数であった。応募範囲も県内外からだけでなく、韓国・中国・台湾・ベトナムなど外国留学生の志願者もあった。

しかし、その後の入試をめぐる状況はやはり厳しさを増した。十八歳人口の減少という大勢の上、コミュニティ政策学部という学部はまだ受験生や高校側の理解を十分に得られない傾向があつ

た。そのため、コンセプトを受験生や高校側に理解してもらうよう努め、来る二十一世紀を「コミュニティ世紀」と位置づけて、その中で「コミュニティ世紀のプロデューサー」を育成するという趣旨の広報活動を展開していった。コミュニティ診断士・ボランティア実務士・社会調査実務士といった資格取得が可能となる体制もつくり上げていった。

こうした教育充実の努力の成果は、例えば愛知県の「学生提案型地域づくり協働支援事業」のモデル事業にコミュニティ政策学部学生の企画案が選ばれる（平成十六年）ということにもあらわれた。この事業は愛知県が平成十五（二〇〇三）年度から実施し出した施策で、学生グループが行政、NPO、地域づくり団体など地域における他の団体と協働して地域づくりを進めるに對して、優れた計画はモデル事業として実施に要する経費を県が負担するというもの。これにコミュニティ政策学部の学生が企画したプロジェクトが選ばれ、モデル事業として高く評価されたのであった。

2

コミュニティ政策学部が新設された同じ四月、愛知学泉女子短期大学においては、若林キャンパスにあった国際教養科を岡崎キャンパスへ移転した。実は、短期大学は安城（桜井）・岡崎・豊田（若林）の三カ所に分散していた。これを一カ所に統合することが学園の長年の夢だった。まず第一歩として、コミュニティ政策学部新設に伴って国際教養科の定員を百五十名から八十名としたことを

契機に岡崎キャンパスへ移転した。

平成十（一九九八）年十二月には、創立八十五周年を記念して大学・短期大学の歌『いまここに』が制定された。

いまここに空はてしなく

国々の境を知らず

どこまでも人をいざなう

限らない地平のぞんで

いまここに夢を始める

谷川俊太郎作詞、林光作曲によるものである。学園には昭和二十八（一九五三）年に制定した、

大木惇夫作詞、山田耕筰作曲の学園歌『永遠の女』があった。しかし、女子学園当時の作で、歌詞

にも「あこがれは永遠とわの女おんな」など女子に限定されたところがあり、

大学が男女共学園になった実態にはいささかそぐわないということもあって、新たに校歌が制定されたのだった。いまでは、この歌は大学・短期大学の歌であるとともに、安城学園高等学校の歌としても広く歌われるようになっていいる。

こうした学園の統一意識は、前年十一月に発表された「安城学園シンボルマーク」でも醸成された。



安城学園シンボルマーク

シンボルマークは創立八十五周年を機に学園全体を象徴するマークとして制定したもので、安城の頭文字「ア」「A」をモチーフとした、鵬（たけのこ）が天に向かって羽ばたくデザイン。地域社会に根をおろし未来を見つめる広い視野と心をイメージし、マーク右の形の青色が未来を見つめる「先見性」を、左の形の緑色が地域に根差す「庶民性」を表現している。作者は、山形市在住のグラフィックデザイナー、松岡英男。六百二名、千二百点に及ぶ公募作品の中から選ばれたものだった。

学園が次に展開したのは高等学校での男女共学制導入だった。

3

この頃から論議されるようになった学校週五日制の実施については、平成十一（一九九九）年三月の文部省通知で平成十四（二〇〇二）年四月一日からすべての土曜日を休業日とする完全学校週五日制が実施されていくが、安城学園では安城学園高等学校が県下の他校に先駆け、平成四（一九九二）年四月に導入、岡崎城西高等学校も平成九（一九九七）年に移行した。学園の高等学校において続く課題は男女共学化であった。これが平成十一（一九九九）年四月、女子校の安城学園高等学校、男子校の岡崎城西高等学校とともに男女共学制に踏み切ったのだった。

共学への移行準備は、平成十（一九九八）年に始まった。共学校見学に始まり、共学化に伴う施設設備―保健室・更衣室・トイレなどの拡張・改修、制服制定、学校案内作成、広報活動などこま

ごまとした準備が進められた。

応募状況が気にかかった。しかし、幸い大きな問題はなかった。

安城学園高等学校では、入学生徒六百七十七名のうち、男子生徒は八十九名、全体の一三%だった。一組から八組までを共学クラス、九組から十七組までを女子クラスに編成された。

「明るく元気な本学園の良さを、男女共学を一つのばねにして更に発展させ、活力に満ちた学園生活を実現していつてもらいたいと期待を大きくしています。学校の施設・設備も男女共学にともなつて大きく変わります。すでに体育館は全面改装されて明るく使いやすくなっておりますし、昨年から工事中であった南館も最後の仕上げ工事に入っており完成間近です。一年生の皆さんが待望の新館に移るのももうすぐです。」

時の校長・三浦定夫は学園報『彩雲』六十三号に、「順調にスタート・活気あふれる日々」といった感触を述べたのだった。

岡崎城西高等学校でも、安城学園高等学校とは事情を異にしたが、男女共学に伴う変化は大きかった。

平成十一（一九九九）年二月、新入生選抜試験を実施したが、八百九十三名もの女子が受験し、共学の順調なスタートを予測させた。四月七日、共学最初の入学式を挙行した。女子生徒は百五十二名、新入生の二三%という率であった。「進学を目標とした女子生徒を二割確保する」という目標どおりだった。基準を男子より高く設定したので女子生徒には優秀な者が多く、新入生宣

誓は女子が代表して行った。

4

「時代の要望に対応する新しい教育環境、『男女共同参画』の時代に合った幅広い教育を行い、地域に開放された魅力ある学校を目指す」

共学化の方向性はこんな文言で表された。この高揚感が示すように、岡崎城西高等学校の共学第一期生の高校生活は十七クラス編成、男女同席で開始された。当然のこととして「混合名簿制」（男女別になっている名簿を男女混合にすること）を採用した。このことは予想以上の反響を呼び、入学式のときをはじめマスコミがしばしば取材に訪れた。



共学初の岡崎城西高等学校入学式

共学初年度は、女子生徒は全校生徒の一割にも満たなかった。だが、女子生徒たちは、男子校の中にあっても意気軒昂だった。学校行事などでも、明るく気後れしない活動が展開され、男女数の不均衡を感じさせなかった。校内の雰囲気も大きく変わっていった。

「学内が明るく活性化してきている」

「女子の方が行動面では積極的である」

共学の一年を振り返って行われたアンケートでは、教職員の多くがこう回答した。

一方、女子生徒へのアンケート結果では、「楽しく充実していた」が六三%、「よい友達ができた」が九三%。学校に対する満足度も約七〇%に達する高評価が得られた。

教職員にとっては、これまでの男子オンリーから女子生徒への対応に戸惑いを感じることも少なからずあったものの、共学は学校活性化に大きなプラスになっていた。

こうした男女共学の話題が熱く語られるうち、曉理事長が政策室で提案していた「学園報告討論会」がいよいよ動き出した。

理事長の諮問機関として発足した「政策室」は新たな教育方針の実現に向けて課題に取り組むものであり、男女共学化やカリキュラムの検討などその後の方向性が決められていったが、政策室ではまた、教育の点検と評価のための「学園報告討論会」の継続的な開催が提案された。目的は、「学園に在職する全教職員が一堂に会し、日々抱えるさまざまな課題を共有し、教職員個々に使命感を自覚させ、自らを高揚させよう」ということにあった。

5

初めての「学園報告討論会」は平成十一（一九九九）年六月十九日土曜日に開催された。会場は三河湾に面した景勝地の西浦温泉ホテルであった。ここに大学から幼稚園までの全教職員四百一名



第1回学園報告討論会での基調報告

が集まった。

会合では、学園の現状と将来展望について報告がされ、互いの教育実践を確認し合った。

二つの高校の現状報告には精気があった。

学校五日制による新カリキュラムをスタートさせた安城学園高等学校では、「触発と自学主義」をキーワードにして、私学らしい面白いのある特設科目の設定や系列大学・短期大学と結びついた教育内容を柱に据えるなど、教育を「量から質へ」と転換を図ったことを報告。

土曜日は「自学の日」と位置づけて、学校開放、土曜講座、公開講座、フィールドワークなどを導入、海外ホームステイや教科のセミナー旅行など教室を飛び出した学びのステージも多彩に企画している、こうした生き生きとした実態が告げられた。

また、岡崎城西高等学校でも、平成五（一九九三）年度から学校改革に取り組み、国際化・情報化の進む現代社会の中で建学の精神に基づいた教育を展開するために「セルフコントロール＆コミュニケーション」という教育目標新しく掲げて教育改革を進めてきたこと、また完全学校五日制により、新学習評価の導入や生徒・地域の人々への土曜セミナーを行い、「伸び伸びとしたより魅力ある学校」を目指していることなど、これまでに培ってきた成果が報告された。

それは、清穀理事長時代から考える「時代の流れに敏感に反応した新しい教育の創造」「大きく変化する時代に対応する教育の量から質への転換」を柱に据えた教育の具体的な進展でもあった。一方、多くの課題を抱える大学と短期大学では、危機をどう克服するかなど、そのあり方をめぐって白熱した議論が交わされた。

「縦の接続、横の連携」をテーマとして行われた集会だったが、まずは一応の成果をみた。学園報告討論会の開催は、以後、年間の行事として定着していった。

6

学園報告討論会で教育成果を謳^{うた}った高等学校では、その活発さを象徴するように、その後集中的に施設の充実が続いた。

安城学園高等学校では、

・新南館竣工（平成十一年）

・新西館（カフェテリア、小体育館、視聴覚室、美術室、実験室など特別教室棟）竣工（平成十二年）

また、岡崎城西高等学校においても、

・新西館竣工（平成十二年）

・第二次再開発、新北棟・プール・コミュニティ棟竣工（平成十三年）



豊田キャンパスの全面人工芝サッカーグラウンド

- ・全天候型グラウンド完成（平成十四年）
 - ・全教室に大型画面プラズマテレビ設置（平成十六年）
- そして大学では、

・豊田キャンパス、再開発事業で全面人工芝のサッカーグラウンド完成（平成十七年）

と連年の設備充実が図られていった。

*

学園報告討論会では大学・短期大学のあり方が議論のタネになったが、男女共学はまもなく短期大学においても導入される。

平成十二（二〇〇〇）年四月、「愛知学泉女子短期大学」を「愛知学泉短期大学」に名称変更し、翌平成十三（二〇〇一）年四月に幼児教育科を除いて服飾科、生活科、家政科、国際教養科の四科を男女共学とした。

これにより、安城学園は幼稚園から大学まで短期大学幼児教育科以外すべて男女共学制が敷かれることになった。

*

大学も時流の変化を敏感にとらえ、学科構成の改編、カリキュラム改革などを積極的に進めていった。

社会的状況や社会的要請の変化に対応するために、平成十二（二〇〇〇）年四月、経営学部でカリキュラムを改革。新しくコース制を定め、更にインターシップなどを導入して、実践的な学習がきめ細かく実施できるよう構成した。

インターシップは平成十四（二〇〇二）年八月から始めた。豊田市にキャンパスを置く立地特性から、実習先は自動車関連製造業を主に、卸・小売、サービス業のほか、地元自治体や商工会議所など幅広い分野に及んだ。

7

大学では、更に家政学部でもコース制から専攻制への改編に取り組む。従来、栄養士については大学家政学部と短期大学生活科で養成していたが、管理栄養士に対する社会的ニーズの高まりに積極的に対応するために、平成十四（二〇〇二）年四月、家政学部を家政学専攻、管理栄養士専攻の二専攻体制に改組した。

短期大学でも翌平成十五（二〇〇三）年に生活科を食物栄養科に名称変更しただけでなく、平成十六（二〇〇四）年には既存の服飾科、家政科、国際教養科を統合して生活デザイン総合学科という新しい地域総合科学系の学科を全国の短期大学では三番目に開設することにした。食物栄養科を食物栄養学科に、幼児教育科を幼児教育学科に名称変更した。これにより、短期大学は生活デザイ



家政学部の調理実習

ン総合学科・食物栄養学科・幼児教育学科の三学科体制（現行）を構築することになった。

大学・短期大学における管理栄養・食物栄養にかかわる改編は、その頃の社会情勢の変化に敏感に対応したものであった。

近年、生活習慣病の増加や高齢社会の進行など社会情勢の変化によって、栄養士の役割も大きく変わってきた。健康の維持・増進だけでなく、医療施設や在宅医療の場で医者と看護師と協力しながら治療や疾病予防等の役割が求められるようになった。このことから、厚生労働省では管理栄養士の質を高めることを目的に平成十四（二〇〇二）年にカリキュラムを改訂した。それまでのカリキュラムでは四年制の学部教育を受けていても、一年間の実務経験がないと管理栄養士国家試験が受験できないことになった。

大学が管理栄養士専攻を打ち出したのは、その対応であった。

管理栄養士養成施設を備える大学は愛知県下に十指に及ぶ。しかし、多くは名古屋市とその近郊に集中していて、三河地区では愛知学泉大学以外になく、地域オニリーワンの存在を誇る。しかも、静岡県西部地域にかけて養成施設がない実情から、栄養課程在学学生は三河・静岡西部地区からの通学が過半を占め、また、昭和六十二（一九八七）年度から全国に先駆けて家政系大学として男子学

生を受け入れたことにより、愛知学泉大学は男子で栄養士免許取得が可能な四年制大学として長く唯一の存在となっていたが、さらに管理栄養士国家試験受験資格が魅力として加わった。

そうした意味でも、学園は三河地区における栄養士及び管理栄養士の養成に大きく寄与するものとなっている。

8

学園各校と並んで、幼稚園でもまた、「豊かな心と潜在能力の開発」を目指す教育理念のもと、社会情勢の変化に対して新たな対応を図っていた。

三幼稚園共通で、平成五（一九九三）年に保育に体操を導入、平成七（一九九五）年には夏まつり・夕涼み会を開始。また、桜井幼稚園が夏まつり・夕涼みとともに親子給食を開始したが、翌平成八（一九九六）年には愛知学泉大学附属幼稚園、愛知学泉女子短期大学附属幼稚園でも導入されていった。

その後、平成十年代に入って三園は、平成十一（一九九九）年四月に愛知学泉女子短期大学附属幼稚園が開園五十周年、平成十二（二〇〇〇）年四月に愛知学泉大学附属幼稚園が三十五周年、平成十六（二〇〇四）年四月に桜井幼稚園が開園三十周年の節目をあいっいで迎えるが、これに対して愛知県私立幼稚園連盟からそれぞれ功労園表彰を受けることになった。



愛知学泉大学附属幼稚園



愛知学泉大学附属桜井幼稚園



愛知学泉短期大学附属幼稚園

社会情勢の変化への対応では、女性の社会進出、共稼ぎ家庭の増加によるニーズに依えて、愛知学泉大学附属桜井幼稚園で平成二十（二〇〇八）年から、愛知学泉女子短期大学附属幼稚園で平成二十一（二〇〇九）年から満三歳児の保育を始めた。

園舎を全面新築（平成二十一年）したのをはじめ、〃わらべうた〃の導入、平和を祈るキャンドル会、秋まつり、冬のクリスマス会、英語遊び、のびのびの〜ん体操、ロボット遊び、新春お茶会、ひなまつりお茶会など、さまざまなカリキュラムを新たにスタート（愛知学泉大学附属桜井幼稚園）させて、子どもたちの豊かな情操教育に努められている。

この間、幼稚園の園長は、寺部芳子が三園を兼任していたが、昭和五十九（一九八四）年十一月三十日、その逝去により、やや空席を経て、昭和六十二（一九八七）年四月、愛知学泉女子短期大学附属幼稚園と愛知学泉大学附属幼稚園の園長に伊藤慶美、翌六十三（一九八八）年四月に愛知学泉大学附属桜井幼稚園の園長に木村順美が就任した。慶美と順美は清毅の次女・三女で、のちに学園理事長に就

任する暁（清毅長男）及び学園法人理事長補佐兼事務局長・堀本保美（清毅長女）とともに、父の遺業を継ぐことになった。

その後、愛知学泉大学附属幼稚園長は木村順美から芳我岳思、愛知学泉女子短期大学附属幼稚園長は築山芳夫、青山秀継、森脇康代が歴任して、地域での人づくりの礎を守り固めている。